

議員（氏家 法雄）

はじめに 200 人以上が死亡したスペイン東部の記録的な洪水からおおよそ 1 箇月が経過しました。被害を受けた地域では、復旧作業が進められていますが、今も残る土砂の処理や生活に必要な物資の供給などが課題となっております。

また、能登半島地震の発生から今月 1 日で 11 箇月が経過しました。石川県と新潟県、富山県で合わせて 463 人が亡くなり、このうち災害関連死は 235 人と言います。地震の発生後 2 度目の本格的な冬を迎える中、災害関連死を防ぐための対策が続けられています。被害に遭われた皆様には、改めてお見舞いを申し上げますとともに、一刻も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

そこで 2 番、氏家 法雄、今回の議会では多度津町の教育環境について、いくつか質問させていただきます。

丸尾町長は 3 月に発表した施政方針の中で「基本政策の 1 点目」は「安心して子育てができ、健やかに暮らせるまちづくり」として【子育てをしやすい環境づくり】を重要な政策と位置付けています。具体的には【豊かな心を育てる教育の充実】として「豊かな心を育てる教育の充実であります。子どもたちが明るい未来を描き、主体的に生きるための資質と能力を育むために「学ぶ楽しさ」と「教育にかかわる喜び」を味わえる教育を推進し、「幼・保・小・中の連携」と「学校・家庭・地域のつながり」を深めることで実効性のある教育、多度津の「ひと」、「こと」、「もの」を大切にしたい教育を推進していきます」と述べています。

先月 28 日付「四国新聞」では「ICT 活用の授業公開」との見出しで、国の「リーディング DX スクール」事業のモデル校である多度津中学校に香川県内外から 60 人の視察があったと伝えています。

限られた予算と人材で町の職員・教職員の皆さまが懸命に環境づくりに取り組まれていることを伝えるもので、有木校長は「生徒が主体的に学習を進めるために我々は何が出来るかを考えている。他校の取組も参考にしながらブラッシュアップしていきたい」と意気込みを語っています。

先進的な取組に尽力されている姿には本当に頭が下がりますが、こうした恩恵を受けることの出来ない児童・生徒さんも存在するのも一方の事実ではないでしょうか。そこで、本町の「不登校」の問題に焦点を当ててみたいと思います。

はじめに文部科学省初等中等教育局児童生徒課が本年 10 月 31 日に発表した「令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、昨年度、全国の小・中学校で 30 日以上欠席した不登校の状態にある子どもは 34 万 6,482 人で、前の年度と比べて 4 万 7,000 人余り、率にして 15% 多く、11 年連続で増加して過去最多となりました。このうち、小学生が 13 万 370 人で 10 年前の 5 倍、中学生が 21 万 6,112 人で 10 年前の 2.2 倍に、それぞれ増えています。このほか高校生も 3 年連続で増えて 6 万 8,770 人と報告されてい

ます。

不登校の状況としては「学校生活に対してやる気が出ない」が 32.2%と最も多く、次いで「不安・抑うつ」が 23.1%、「生活リズムの不調」が 23%などとなっています。また、認知されたいじめの件数は、小学校が 58 万 8,930 件、中学校が 12 万 2,703 件、高校が 1 万 7,611 件、特別支援学校が 3,324 件の合わせて 73 万 2,568 件で、前の年度よりも 5 万件余り増えて、こちらも過去最多となっております。

こうした不登校の子どもの増加について文部科学省は、「子どもの状況に応じた教育が必要だという保護者の意識の変化も背景にあると考えられる。不登校の要因を的確に把握し、きめ細かな支援が必要だ」とした上で、いじめについては学校側が組織的な対応が出来ず、重大事態になった例もあるとして、いじめの早期の発見や対応を促していきたいとしています。

この統計を受け、本町での不登校についての現状とその対応について質問させていただきます。

まず、はじめに多度津町での不登校の状態にある子どもの数をお教え下さい。

教育長（三木 信行）

氏家議員の不登校の状態にある子どもの数についてのご質問に答弁をさせていただきます。

現在のところ、小学校12名、中学校28名です。これは昨年度の同じ時期と比べて、小学校は同数、中学校は2名減となっています。全校児童生徒数は小学校989名、中学校506名です。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今、昨年度の小・中学校の不登校状態にある子どもの数をお示し下さり、2名減少という健闘ぶりを伺うことが出来ましたが、全国と比較した場合は、どのような状況でしょうか。再質問です。

教育総務課長（池田 友亮）

氏家議員の再質問にお答えさせていただきます。

先ほどの教育長の数字は、今年度の今現在のものになっています。2023年度の全国問題行動不登校調査によりまして小学校の方、全国で千人当たりの人数ですが、21.4名、多度津町においては10.7名となっております。中学校において、全国では千人当たり67.1名で、多度津町では58.5人となっております。以上です。

議員（氏家 法雄）

全国と比較しても多度津町の不登校の問題、非常に健闘されている状況にあるかと思うんですが、2番目の質問になります。文部科学省の調査では「学校に対してやる気が出ない」、次いで「不安・抑うつ」、「生活リズムの不調」が理由として続きます。多度津町では現在 40 名の小・中学生が不登校状態にあると伺いました

が、こちらの理由の把握は、ございますでしょうか。

教育長（三木 信行）

氏家議員の不登校の理由についてのご質問に答弁をさせていただきます。

不登校の状態になった理由として一番多いのは「生活リズムの不調」で、小学校4名、中学校16名です。「やる気が出ない」は小学校4名、中学校2名、「不安・抑うつ」が小学校2名、中学校6名、「親子の関わり方の問題」が小学校2名、中学校4名となっています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

生活リズムの不調、最も小・中学校合わせてのことですが、理由として多度津町の場合1番になるかなと思うんですが、ちょうど先週、多度津中学校の有木校長と懇談する時間がありまして、そこでも様々、今ライフスタイルが多様化していますので、初め話を伺うまでは、僕も生活リズムの不調っていうものが余りピンと来なかったんですけども、親の多様な働き方とか、そういうところで生活リズムが必然的に乱れてしまう子どもさんもいらっしゃるっていうことは、その時に伺いました。それが今、数字として裏付けられた結果なんですけれども、大人でもこの生活リズムの乱れていうものは、体調不良を招きやすい問題です。子どもの場合、大人以上に心身ともに多大な影響を与えるものになりますので、こうした子どもたちに対する配慮、育成っていうものが、今後、本町の課題になってくるかと思いますが、そこで、そうしたものにどう向き合っていくかということで、3番目の質問に移ります。

本町での不登校の対策ですが、学校などの教育からのアプローチのほか、スクールソーシャルワーカーなど福祉的な側面、また、カウンセラーの支援といった心理的なアプローチが考えられますが、それぞれ、どのような対策を現在、実施されているのか。また、本町独自の対策があるようでございましたら、お教え下さい。

教育長（三木 信行）

氏家議員の不登校児童・生徒への対策についてのご質問に答弁をさせていただきます。

学校では不登校傾向の児童生徒に電話連絡や家庭訪問を継続して行い、学校と繋がっている状態が継続するようにしています。さらに子どもの状況に応じて、可能な時間での登校が出来るようにしたり、個別に学力面での支援をしたりしています。また、スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーが各校を回り、児童・生徒及び保護者の相談に乗ることが出来るようになっていきます。必要に応じて個別のケース会を開き、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーにも出席してもらい、それぞれの子どもや保護者にどのような支援をしていけばよいかを話し合っています。

なお、不登校の状態にならないよう、児童生徒にとって日常の学校生活が充実して

いることが大切であり、各学校では楽しく分かる授業づくりや互いを尊重し合える学級づくり等に日々取り組んでいます。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今、教育長の方から、きめ細やかなケース会の実施、また、不登校の状態にならないような学級づくり、こういった日々の実践をご紹介頂きました。また、その継続されていることが、不登校児童数の減少に繋がっているものだと思いますので、こちらには本当に教育行政、また、教職の現場におられる方々には感謝申し上げます。そこで、4番目の質問に移ります。こうした困難を抱える子どもの問題は、それぞれの担当がバラバラに動いてしまえば、問題解決するどころか、より悪化させることもしばしばあります。ソーシャルワーカーやカウンセラーほか学校当局との相談・連携・協力はどのようになっているのでしょうか。質問させていただきます。

教育長（三木 信行）

氏家議員の有機的な対応についてのご質問に答弁をさせていただきます。

個々に関する情報は必要に応じて、学校とスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、教育委員会、健康福祉課、児童相談所、医療関係等と共有するようにしています。それにより担当がバラバラに動くのではなく、それぞれの機関が連携して、必要な動きが出来るようにしています。先程申し上げましたケース会も各関係機関での情報を共有するための重要な会になっています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

多度津町役場の各課と、また、教育現場の方々の密接な連携関係というものを今後も維持して頂きたいと思いますが、また、この後の質問でも取上げますけれども例えば、この学習について行けない子どもをどのように学校に向かせるのかっていうところで、オンラインであったり、個別最適な学びっていうものが様々なギミックとして加わることで、子どもが自由に学習していける環境へと繋がっていくものだと思うんですけども、こうした学習環境の整備について質問させていただきます。不登校の対策については、10月31日のNHKの報道で、こうした問題に詳しい上越教育大学のいじめ・生徒指導研究センターの高橋センター長は、先の文部科学省の調査結果について、学校に行かないことがよくないという従来の意識に変化が出ていると指摘し、フリースクールなどが社会的に認知されて、子どもがストレスを抱えたまま通学するよりも自分が学びやすい場所で学ぶことが可能だということが広く認識されて来ている。とした上で、学ぶ場が整った環境であれば、学校教育に限らなくてもいいのではないかと。と保護者が気づき始めていると分析しています。一昔前であれば、子どもを引っ張ってでも親が学校に連れていくっていう、これも一つのハラスメントになろうかと思うんですが、そういった意識も変わってきてい

る。とすれば、その受皿の問題になります。

そこで5番目の質問です。不登校など困難を抱える児童に対する学びやすい環境の本町での整備状況と困難を抱える世帯に対する環境整備、利用促進の支援はございますでしょうか。

教育長（三木 信行）

氏家議員の多様な学習環境の整備についてのご質問に答弁をさせていただきます。

本町では教育支援センターがあり、学校に通いづらい子どもが学ぶことが出来るようになっていきます。一人1台端末を活用することにより、学校で配布されたプリントや授業の板書が見られるようになっていくため、学校の授業の進み具合も分かります。

また、オンラインで学校での授業を見ることが可能なので、学校内の教室以外の場所や家庭からも授業を見ることが出来るようになっていきます。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

ご答弁有難うございます。

多度津町は、非常に熱心に教育環境の整備に取り組まれていることをご紹介頂いたんですけれども、ちょっと先日から中讃地域の不登校のお子様を抱える親御さんのお話会に参加させて頂いております。多度津町だけでなく、丸亀にお住まいの方とか色んな方がいらっしゃるんですけれども、皆さんからお話を伺いますと近隣市町に比べて、多度津町がこの不登校の問題に関しては、きめ細やかに寄り添って下さっているということで大変助かっています。という声を伺いました。もちろん丸亀市なんかと比べますと多度津は中学校が一つですので、対応がまとまってとれるであるとか、そういうアドバンテージっていうものは、もちろんあるんですけれども実際その現場で関わってくれる人々が家族に寄り添ってくれているっていうのは、本当に有難いとおっしゃっていました。あるご家庭の方は、多度津に転入するのか、善通寺に転入するのかっていうのをそういう話を聞いた上で、多度津町に転入されたっていう親御さんもいらっしゃいました。こうした先進的な取組に関しては、現状でいうと、そういう熱心に関わってくれる支援員さんとか教職員さんのパーソナリティに依存しているところが現状です。もうそれは有難いことなんですけれども人に依存するだけじゃなくて、そこは制度としてしっかり人が代わったら出来なくなるっていうことじゃないような仕組みづくりを今後はお願い出来ればと思うところです。多度津町の教育現場っていうものが、今回この不登校の問題を敢えて取上げさせて頂いたのは、多度津町の教育行政、また、教職員の皆様が一生懸命この問題に取り組まれていることを広く町内の方々にも知って頂きたい。また、労を讃えたいという思いで、今回この問題を取上げさせて頂きました。

議員活動について解説した議員必携によれば、一般質問とは大所・高所から政策を

建設的立場で議論する場所だと言われております。何ていうんですかね、小さな瑕疵っていうものを大きく見せるようなことだけじゃなく、どのようにして議員と行政の執行部の皆さんと、より良いまちづくりをしていくことが、明日に向かって出来るのかどうかっていうことも僕は議員の役割だと思っています。もちろん、うまく出来てないところに関しては、制度設計を絶えず更新しながらやっていかなきゃいけないんですけども、そうした思いで今後ともこの不登校の問題、また、不登校の陰にはいじめの問題は現実にあります。今後も加速度的に一人一人の多度津の子どもから大人まで暮らしやすいまちづくり、一緒に作っていただきたいと思います。そこで次の、これも教育に関する質問になりますが、質問に移らせて頂こうかと思えます。冒頭でも紹介しましたが、ギガスクール这个话题です。

多度津町では現在、文部科学省のリーディングD Xスクール事業を受託し、多度津小学校と多度津中学校が指定校として実践をしております。文部科学省初等中等教育局学校デジタル化P Tリーダーの武藤久慶はリーディングG X事業について、次のように述べています。本事業では、全国全ての都道府県及び政令指定都市に指定校をおき、G I G A端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を徹底的に活用し、情報活用能力の育成を図りつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務D Xを推進し、全国に好事例を展開することとしましたと、この事業の概要を述べています。

そこで1点目の質問です。文部科学省の方針によれば、汎用的なソフトウェアとクラウド環境を徹底的に活用し、中略しますが、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務D Xを推進とありますけれども、具体的にはどういう端末やソフトウェアを活用し、また、何をなすのかについて、ご教示下さい。

教育総務課長（池田 友亮）

氏家議員のリーディングスクールD X事業に活用する端末やソフトウェアについてのご質問に答弁をさせていただきます。

端末はA p p l e社、G o o g l e社、M i c r o s o f t社の端末から各自治体を選択するようになっており、本町はA p p l e社のi P a dを使用しています。汎用的なソフトとして各社のウェブブラウザや文書作成ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどがあります。また、クラス管理やチャット、ファイル共有などのソフトも活用しています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今、池田課長からハードウェア的な説明を頂いた訳なんですけれども、例えば、この後、教育長にも伺おうと思うんですけれども、こうしたブラウザとかオフィスアプリケーションというものを利用して、学生さんとかはどのような授業の中で使われるのかなあっていうのが興味がありますので、そこを再質問させていただきます。

教育長（三木 信行）

氏家議員の再質問に答弁をさせていただきます。

児童・生徒がどのように活用するのかということですが、1 番よく活用しているのはロイロノートというアプリです。そこで、1 番活用するのは、例えば授業中に、どの子どもが、どのような考えを持っているのかっていうのが一目に分かります。それは例えば、共有ノートというような仕組みがあって、そこで自分の意見をそこに書き込むと全員が見ることが出来ます。それによって従来のように手を挙げて1 人ずつ発表するという必要もないですし、教師が全部分かるし、あるいは友達の考えをまねて自分の考えをするということも出来ます。それから、提出箱というものがある、それによって最終的に学んだことをそこに置くことによって、全員の考えが分かります。そしてクラウド上とか端末にそれを残しておけるので、次の時間にも、そこでもって活用することも出来るということになります。個別最適は別のところにもありますので、時間があればお話ししたいと思います。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

出来る訳もないんですけれども、出来ることなら今の小学校、中学校に戻ってやり直したくなるような教育環境だになってというのが伺い知ることが出来たんですけれども、さて、次の質問に移らせて頂こうと思います。今、そういったアプリケーションを活用して学習を深めていく様子をお伺いすることが出来ましたが、この事業ではGIGA端末を活用して新たな学びを創造していく訳ですけれども、謳われているのが、個別最適な学び、また、協働的な学びとなっております。こちらは一体どのような内容なのか質問致します。

教育長（三木 信行）

氏家議員の個別最適な学びと協働的な学びについてのご質問に答弁をさせていただきます。

「個別最適な学び」とは、児童・生徒の学習進度や個性に合わせて学んだり、自分の興味・関心のあるものを選んで学んだりすることです。

個別最適な学びは、指導の個別化と学習の個性化に整理されています。指導の個別化は、個々の児童・生徒に応じて異なる方法等で学習を進めることです。学習の個性化は、個々の児童・生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め広げることです。

「協働的な学び」とは、探究的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ、多様な他者と協働しながら学ぶことです。

どちらかの学びだけではなく、どちらの学びも組み合わせながら、よりよい学びに高めていくことが求められています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今二つの質問で、児童・生徒さんがどのように機械を使いこなしながら、学習を

深めていくのかっていうところが、すごく理解させて頂けたんですが、こちらの事業では、もう一つ推進されるものが謳われています。リーディングDX事業では、教育改革の推進のほか、校務DXの推進が謳われていますが、本町での事例をご説明お願い出来ませんかでしょうか。よろしくお願い致します。

教育長（三木 信行）

氏家議員の校務のDXについてのご質問に答弁をさせていただきます。

リーディングDXスクール事業の指定校では、チャット機能などを活用して教職員間の情報共有をリアルタイムに出来るようにしたり、インターネット環境があれば、いつでもどこからでも仕事が出来たりするような状況を作っています。教員も個々の状況に応じた働き方を選択出来るようになることが考えられます。その他の学校もチャット機能を活用して教育委員会との情報共有を行っています。

また、全ての学校で会議や研究会、保護者への文書などをデジタル化することで資料の印刷や配布、郵送の手間や費用が省けるという良さも生まれています。保護者からの欠席連絡もアプリを通して行い、朝の電話対応などの業務も少なくなっています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

校務DXの推進、様々便利な側面、今ご紹介頂いたんですが、一つだけ要望と言いますか、お願い出来ればと思うんですが、こういったデジタル機器、また、働き方の環境には、情報漏洩、また、セキュリティの問題というものが必ずつきまといます。こちらの方もしっかり対策の方、お願い出来ればと思います。繰り返し、どんなに大きな企業でもセキュリティが破られる。例えば、個人情報漏洩する。こうしたニュースに事欠くことがないのが私たちの暮らしですので、100%安心っていうものは、この世の中には存在しないと思いますけれども、大切な情報っていうものの背景には何かあるのかって言えば、生きた人間そのものが情報の背景にはいる訳ですので、そこはしっかり取り組んで欲しいなと思います。また、この校務効率化に関しては、文部科学省の全国の学校における働き方改革事例集、令和5年3月改訂版の中で、その目的を業務負担を軽減し、教育の質の向上を図るためと記載されています。一つだけ、また、ご注文させて頂ければ、皆様には様々な事例、先進事例を学ぶ中で多度津らしい負担の軽減された教員の皆様の職場環境づくりを一層進めて頂きたいとお願いします。教職員の皆様が伸び伸びと働けるようになることが、子どもの幸福度の向上にも直結致しますので、重点的に取り組んで頂きたいとお願い致します。

そこで、最後になるんですが、リーディングDX事業について、今、様々な角度からお話を伺いましたけれども、本事業を導入する目的、また、効果、そして育む生徒・児童像についてのご説明を教育長にお願い致します。

教育長（三木 信行）



氏家議員の事業導入の目的、効果、育む児童・生徒像についてのご質問に答弁をさせていただきます。

事業導入の目的としては、授業観を変えること、事例を広げることが挙げられます。これまでも子ども主体ということは大切にしてきましたが、教師主導の一斉授業ではなく、これまで以上に子どもが主役になれる授業づくりを目指していきたいと考えています。

10月の多度津小学校、11月の多度津中学校の公開研究会には県内外から多くの方にご参加頂きました。そういった活動を通じて、町内をはじめとした多くの学校に事例を広げることで各校に取組が普及していき、各校での子どもたちの学びがより良い物になるという効果があると考えています。また、先ほどの答弁で述べたように、教員の働き方改革にも繋がる効果があると考えています。

本事業を通して子ども一人一人が自分の学びに責任を持ち、自分の意思で工夫したり、他者と協働したりしながら学びに取り組んでいくことを期待しています。そして、予測困難な時代の中でも様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていくことの出来る子どもを育てていきたいと考えています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今、教育長から多度津中学校・小学校でこの事業を通して育みたい人物像について、丁寧にお話を伺うことが出来ました。そこで最後に一つだけ、これもお願いと言いますか、留意したいところになるんですけども、文部科学省はこの事業について、ビジネスパーソンが活用しているソフトウェアを子どもたちも同じように使う。大人と同じようにクラウド環境を使いこなしクラスメートを含む様々なリソースを参照し、云々とあります。ここは僕も少し引っかかる場所がありますので、この懸念だけお伝えして一般質問を得ようかと思います。

学校とは、本来、こういうビジネスパーソンというキーワードに見られるような市場社会とは一線を画した学びの場であると思います。10年前位ですかね、ハーバード大学の「白熱教室」という番組が話題になりました。その中で政治哲学者のマイケル・サンデルは「それをお金で買いますか」という著作を著していますが、全てをお金に置き換える市場は、必ず腐敗すると説きます。友情や愛、こういったものが、お金に換算出来るのかという問いです。そこで次のように述べています。結局のところ、市場の問題は実は他の人々とともに、どう生きることを望むかという問題なのだ。我々が望むのは、何でも売り物にされる社会だろうか。それとも市場では評価されず、お金では買えない道徳的、市民的というものがあるのだろうか。こういった投げかけをしています。先日、ある高等学校の学生の弁論大会の予選の審査に参加させて頂きました。そこで僕は一つ驚いたのが、自分の未来の夢を皆さん語りますが、未来の夢って聞かれると、こういうものになりたいっていう中で、

職業を選ばれる方がやっぱり目立つのではなかろうかと予測するんですが、半数以上の生徒さんが、例えば、挨拶が必ず出来る人間になりたい。他人のことを思いやれる人間になりたい。こういった価値的な理想像を掲げている生徒さんが多くいたことに驚いた記憶があります。その意味では友愛や平等、あるいは自由を学ぶ学びの場がビジネスパーソン式に法律や金銭感覚、こういったもので置き換えられることのないように取り組んで欲しいとお願いしたいと思います。つまり、学校で育まれる友情や愛、正義といったものを「お金で買いますか」「はい、買えます」とならないようにという危惧です。冒頭で言及した不登校の児童・生徒さんの生きづらさも、こういった価値観の中にあるのではないのでしょうか。

以上、懸念をお伝えして2番、氏家 法雄の一般質問を終えます。